

それでいて瞳の奥には理性的な光があった。凶暴さと知性を兼ね備えながら、相手を威圧する視線。目元に刻まれた傷がさらに迫力を増している。

「そして、セレネ・ミルティウス・アス・セイムローザ王女殿下。むさ苦しい場所で恐縮ですが、ご辛抱願います」

言葉こそ丁寧だが、ザガはにこりともしない。セレネのほうが蛇にいられた蛙のよう
に固まってしまった。ザガの声音は低く、腹の底を震わせるようだ。武人でもここまで威
圧的な空気を放つ者は少ない。

「で？ 我が商会にどのようなご用で」

仮にも王女であるセレネの訪問にも、ザガはまったく驚いていなかった。それどころか
キルサスやルーシア、シザリオンの正体まで見破っている。

〈紅女神騎士団〉はこの時代には存在しなかった騎士団だ。現れたのはほんの数か月前で、
戦果もヴァンデル帝国軍の先遣部隊を退けたことしかない。にもかかわらず、ザガは詳
細な情報を集めていたらしい。若くしてアルジア商会、ひいてはゴルバの街を統率する実
力の片鱗がうかがえる。

「一筋縄ではないかない相手だろう。だが、こちらの交渉役もそう甘くはない。

「〈真なる神器〉を「ご存知か」

シザリオンがザガの前に進み出た。背中を伸ばし、平然とザガの目を見返す。怯えた様

子は微塵もなかった。隙を見ればつけ込まれるのはわかっているからだ。

ザガもまた、〈真なる神器〉の名に反応することなく、すぐさま切り返す。

「セイムローザにその多くが封じられていた神々の器。強大な魔法を伴う武器。国家の至
宝と聞いている」

「封じられていた、と言われたか。なぜ過去形で」

「答える必要はない」

剣呑な言葉での斬り合いが続く。シザリオンもザガも一歩も引かない。むしろ、周りに
いるアルジア商会の男たちのほうがうろたえていた。キルサスが見る限り、ザガと同じく
平静を保っているのは二、三人だ。そのあたりがザガの腹心になるのだろう。

無理もない。一国の王女がいきなり訪ねてきたり、〈真なる神器〉などという途方もな
い存在の名前を切り出されたりして平気なほうがおかしい。それとなくザガの顔色をうか
がう者や、隣同士でひじを小突き合う者など、小さな反応だが確かに動揺が広がっている。

ただ、肝心のザガはいくら揺さぶられても動かない。

「〈真なる神器〉の一つがこの街の近郊に飛来したと思われる。あなた方なら何かご存じ
ではないか？ いや、むしろすでに手に入れたとか」

「知らない」

かなり踏み込んだところまでシザリオンが話した。ザガは興味なさそうに鼻を鳴らす。